逐次通訳のノート――芸術家のツール

鄭　　仰平　著
永田　小絵　訳

CONSECUTIVE NOTES －An Artist's Tool－

Yang Ping Cheng
Translated by NAGATA Sae

原著者　鄭仰平（Y.P.Cheng）について

香港出身の中英会議通訳者。香港返還交渉の際に英国側首席通訳者を務めた。英政府退職後は通訳訓練に携わり、米国モントレー国際大学院教授、台湾輔仁大学通訳学研究所所長、香港大学・中文大学・香港城市大学・バプティスト大学翻通訳学科主任を歴任、高等教育機関で通訳者の後進を育成する傍ら75歳まで現役の会議通訳者として活躍した（後掲の略年譜を参照）。

「逐次通訳のノート――芸術家のツール」について

1989年に香港翻訳学会・香港市政局公共図書館共同主催による「香港における翻訳および通訳の発展」シンポジウムで発表された講演の記録。その後『翻訳新論集』に収録された。脚注はすべて翻訳者による訳注。

はじめに

逐次通訳のノート[1]について話し始める前に、繰り返しになることを承知で、そもそも逐次通訳とは何かを説明しておきたい。というのは、一般的には同時通訳でないものは即ち全て逐次通訳であると考えられているようだからだ。

我々専業通訳者に言わせれば、逐次通訳は非常に専門的な仕事である。同時通訳より容易だ、などとは決して言えない。なぜなら我々の逐次通訳に対する定義は、発言者がどんなに長く話しても通訳者はそれに対応できなければなら

1　逐次通訳の際に発言を聴きながらとるメモのこと。

ないというものだからだ。もちろんこれは原則にすぎない。香港の実際の労働環境では、通訳者に３分間以上の逐次通訳を強いることはほとんどない。自分自身の通訳経験としても、原稿なしで５分間以上中断なく話し続ける発言者はほとんどいなかった。しかし通訳者にとって３分間以上の発話に対応できる能力は必須であって、そうでなければプロの通訳者とは言えない。

ノート・テイキングの必要性

逐次通訳とは何かという説明を読んで、逐次通訳者がなぜノートをとらなければならないか理解できただろう。

ここでノートは一種のツールにすぎないことを強調しておきたい。中国の古い言葉に「工欲善其事必先利其器」[2]（工その事をよくせんと欲せば必ずその器を利とす―大工がよい仕事をしようと思ったら必ずまず自分の道具を鋭利にする）とある。しかし、良い道具があっても卓越した技能がなければ、せっかくの良い道具も無駄になってしまう。逐次通訳者が備えるべき最も重要な能力は発言を聞いて瞬時に理解することだ。この前提条件があってこそ、ノートは「利器」の役割を果たすことができる。

ノートをとること（以下、「ノート・テイキング」）の第一の目的は、通訳者は（一部には例外があるかもしれないが）、３分間以上の発言内容を全て記憶することは不可能であるため、ノートで補完する必要がある、ということ。

第二に、部外者はおそらく認識していないと思うが、ノートは発言を理解する手助けにもなる。どういうことかと言えば、我々はノート・テイキングの前に分析というプロセスを経なければならないためである。若い諸君は勉強したことがないかもしれないが、私たちは学生時代に英語の授業で構文分析（Sentence Analysis）と解析図（Diagram）を学び、主語・動詞・形容詞など、全てを明確に分析しなければならなかった。

ノート・テイキングも原理はこれと同じだ。普通は発言を一字一句全て書き止めることは不可能なので（その必要もない）、発言を聴いてすぐに要点をつかんで書ける能力が必要である。ノート・テイキングを行っている間、通訳者は常に構文分析を行っており、これが間接的に発話をより明確に理解する手助けとなっているのである。

２　『論語』衛霊公第十五。

ノート・テイキングの方法

手を動かしてノート・テイキングを始める前に、我々はまず自分自身に問いかける――発言者の先ほどのあの話はいったいどういう意味なのか、要点は何か。そして、発言の意味をしっかりと理解してからノートをとり始める。これこそが本当のノート・テイキングである。

我々はまた文と文との関係を理解しなければならない。さもないと、個々の語句の意味しか理解できず、パラグラフのまとまり全体で何を意味しているか、さらには発言全体の意味を粗略にしてしまうことになる。これは、文に含まれる一つ一つの語の意味を理解しながら、それらの語の連なりが何を意味するのか理解できないのと同じくらい危険なことだ。ノートに発言の細かい部分が抜けていてもかまわないし、あまり適切でない形容詞が書かれていてもかまわない。しかし、優秀な通訳者は発言の全体像を的確にとらえ、発言者のメッセージをはっきりと確実に表現できるノートがとれなければならない。

ノート・テイキングの際には、なるべく発言者を観察すべきである。初めて逐次通訳の訓練を受けた時には、発言を聴きながらノートをとるだけでも大変なのに、さらに発言者を観察するのでは注意力が散漫になってしまうのではないかと心配する学生が多い。だが実際はその逆で、発言者を見て注意力が散漫になることはなく、むしろ注意力を集中させるのに役立つ。発言者の唇の動きを追うことで音声がよりはっきり聴こえ、ボディ・ランゲージを確認することで意図を理解することもできる。

ノート・テイキングを教えることはできるだろうか。この問いに対しては、通訳界でも意見が分かれるところだ。一般的には、ノートの原理は教えられる、しかし実際にどのように書くかは個々人が練習を重ねて会得するしかない、と考えられている。

速記ができる人はノートもうまくとれるだろうと言う人もいるが、これは完全に間違った考え方である。速記が書き止めるものは単なる音にすぎないからだ。音は、速記者にとっては非常に重要かもしれないが、通訳者にとっては何の役にも立たない。逐次通訳のノート・テイキングを勉強し始めたばかりの学生は、発言を完全に再現しようとするあまり「～の、～だ、～か？」なども全て落とさずに書き止めようとする。これは極めて愚かなやり方で、百害あって一利なしと言うべきである。さして意味のない語にとらわれて、重要な内容を落としてしまうことになるだろう。

次に、ノートのスタイルについて述べる。ノートには普遍的なスタイルがあ

るわけではなく、多くの通訳者が経験的に会得した方法があるだけだ。ノートは一般的にいえば、なるべく上から下へ縦方向にとる。縦書きのほうが横書きより美しく見える等といった理由ではなく、縦書きにすることで内容をより明確に分析できるためである。ノートをとるときは最もシンプルな方法で（文字、記号、さらには図形も使って）主要な内容を書き止める。ノートに用いるのは中国語か英語か、あるいは起点言語[3]か目標言語[4]かという問題は個人によって異なる。目標言語でとるべきだと主張する人は、目標言語で書く場合には通訳者はまず変換のプロセスを経る必要があるため、訳出する際に手間が省けると言う。一方、どの言語を用いるかを気にする必要はないと主張する人は、話の筋道をしっかり表せるものであれば自分の好きなように書けばいい、どうせ文字は記号に過ぎないのだから、と言う。

ノートは「最もシンプルな方法で主要な内容を書き止める」と上述したが、文字・記号・さらに図形も使うのがよいだろう。ここで一例をあげてみよう。昨年[5]、高雄の文藻語文専科学校[6]で短期研修を行った際のことである。ある日の逐次通訳講座で、二十年余り前に初めてインドに旅行した時のことを話した。

その日はちょうどクリスマスイブであった。フェリーが着岸するとき、川面に多くの人が紙を折って作った小舟が浮かんでいるのが見えた。紙の小船の上には小さな蝋燭がともされ、川下に向かって流れていくのであった。

一人の学生のノートは非常にシンプルで、たったこれだけの絵しか描かれていなかった。

なんと単純で、生き生きとしていて、正確なノートであろう。この時、もし私が通訳者であったとしても、このように簡潔なノートは書けなかっただろう。

ノート・テイキングで重要なことは、わかりやすく書くことだ。ほんの１秒

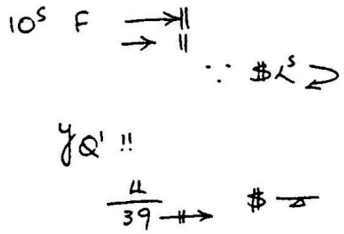
3　起点言語：原文、Source Language。中→英通訳であれば中国語
4　目標言語：訳文、Target Language。中→英通訳であれば英語
5　1988年
6　現在の文藻外語大学（Wenzao Ursuline University of Languages）。1965年外国語専門学校として創立、1999年四年制文藻外語学院に改組、2013年文藻外語大学に改称。

か0.5秒を節約するために雑に書くことは絶対に避けなければならない。さもなければ、訳出するときに何が書いてあるのかわからなくなり、その部分だけが明確に伝わらないだけでなく、スピーチ全体の論理の一貫性にまで影響を与えかねない。

ノート・テイキングでは基本的には国際的に通用する一連の記号を使用するが、個々の通訳者にはそれぞれ自分で作り出して使い慣れた記号があるものだ。ここで強調しておくが、通訳者が主体的に記号を使うべきであって、決して記号に使われることがあってはならない。記号を使うときには、記号は単なる道具に過ぎないことを自覚すべきだ。他人が使い慣れている記号が自分にも適しているとは限らない。記号を使い始めたばかりの頃は焦らずに一つ一つ慎重に使い、使い慣れてくればある文言を聴いたときに自然とその記号が頭に浮かぶようになり、訳出するときにその記号を見ればすぐにその意味を思い出せるようになる。こうなってくれば、その記号は本当に自分自身のものになる。通訳者は記号の主人であって、記号の奴隷ではない。

以下に、いくつかの例をあげてノート・テイキングの技巧について説明してみよう。いずれも台北輔仁大学翻訳学研究所の学生が逐次通訳訓練を受けたときのスクリプトを用いる。最初はインドの映画産業に関する発言と私がとったノートである。

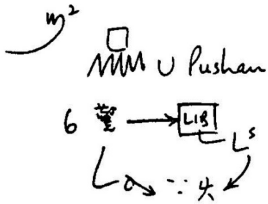
“Recently, dozens of movies are going unreleased, or unfinished, as financiers pulled out of the deals to cut their losses. And the first three months of this year has been disastrous. Only 4 out of 39 movies released broke even.”



次に、韓国の学生運動に関する発言と私のノートを紹介する。

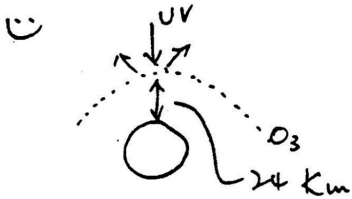
“But the country was shaken two months ago by a violent incident at the university in Pusan. Six riot police officers who tried to enter a library

building which was occupied by students ware later killed in a fire set by the students.”



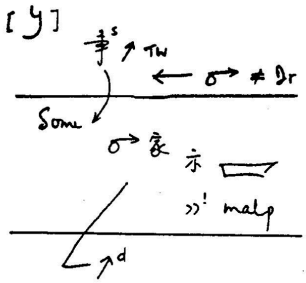
続いて、オゾン層に関する発言およびノートを示す。

“Fortunately, we have the upper atmosphere to protect us. About 24 kilometers above the earth, there is a layer of ozone which helps keep out much of the ultraviolet ray.”



最後の例は、台湾の医師が患者の家族からクレームを受けることがあるという発言とそのノートである。

“In the past year, a number of incidents have risen in Taiwan, due to patients and doctor disputes. In some cases, the families of the patients have paraded in front of the hospital with the coffin of the deceased, accusing the doctors of malpractice. And these incidents have been on the rise.”



ノートから言語への変換

よいノートがとれれば、言語に変換する段階はごく容易である。上手にとれたノートは談話の筋道を明白に示し、発言の主要な内容を明確に記録している。それを読み取る段階に何の問題もあるはずはないのである。逐次通訳の有利な点は、すでに発言者のスピーチ全体、あるいはまとまりのあるパラグラフを全て聞き終わっており、発言の中心的なメッセージがわかっていることだ。したがって通訳を行う際の負担はずいぶん軽くなる。このため、ノートを言語に変換する段階で、通訳者のパフォーマンスに何らかの影響を及ぼす要素があるとすれば、演説の技術だけということになる。

通訳者は役者ではないので、発言者の心情まで完全にコピーすることはできない（通訳者の中には、ただ言語に現れた発言内容だけを訳すべきで発言者の思想や感情まで理解する必要はない、と考えている者もいる）、しかし、発言に込められている心情を訳出から完全に排除することはできないだろう。さらに、通訳者は公の場でも怖気づくことなく堂々と話ができなければならない。

ノート・テイキングの指導

逐次通訳のノート・テイキングを勉強し始めたばかりの学生が最も頭を悩ませる問題は、同時に二つのタスクをこなせないということである。聴くことに集中するとノートがとれなくなり、書くことに集中すると聴くことがおろそかになる。

最初の段階では学生にノートをとらせず、聴くことに集中させたほうがよいだろう。そのほうが話の内容を理解しやすくなるし、記憶力を高める訓練にもなる。論旨の展開が分かりやすい発言であれば、３分間ほどの発言を記憶にとどめておくことは学生にとってもさほど難しいことではない。

しばらくの間、集中して聴く訓練を行ってからようやくノート・テイキングの指導に入るが、ノートには多くを書かせず、数字、人名等だけを書き止めるようにさせる。そして最終段階でノートの原理を教えた後に実際の通訳に使うノート・テイキングをさせるようにするのがよい。

学生にノート・テイキングを教える前に内容理解が重要であることを強調すべきである。この段階では、発言の骨格（要点）が正確に捉えられれば、枝葉末節を少し落とす程度は許容できる。

学生がノート・テイキングの技術をマスターし、それらしいノートがとれるようになった段階になれば、指導者のとったノートと比較する。そして学生の

ノートのミスを指摘し、ミスの原因を検討させる。学生のノートが良いものであれば、クラスメートに示して共有し、学生の自信を高めることもできる。

さらに、私は学生を順番に自分のそばに座らせて自分のノート・テイキングを見せることがよくある。学生たちに見せたいのは何を書いているのかではなく、いつ書き始め、どのように書くかである。言い換えれば私が学んでほしいのはノートをとる精神であって、実際にどう書くかに関しては、私はやはり誰の真似もする必要はないと考えている。

学生のノートに最もよく見られる欠点は、理解・分析能力が不足していることで、これは以下に挙げる二つの方法で改善することができる。

一　訳出後に、理解できていなかったフレーズを再度分析させ、その後に同じようなフレーズを聴いたときに再び同じミスを犯さないようにさせる。

二　要点だけを訳出させる。この訳出方式は全てを訳出するよりもむしろ難しい。というのは、学生は発言の分析に精神を集中し、重要な部分を取り出してノートをとらなければならないからである。そうなると発言を聴く段階でタスクが一つ増えることになるのだが、これは学生の理解力を向上させるうえで非常に役に立つ。要約通訳は実際の通訳業務にも使える技術である。会議時間が足りず、議長が通訳者に発言の要旨をなるべく端的に訳出するよう求めることもある。

指導法の発展

冒頭で述べたように、ノートは一種のツールにすぎない。どんなによい道具を持っていても、職人の技が良くなければ宝の持ち腐れになる。私が教えた学生たちの中には、本人の能力不足のため、どんなによいノートがとれても、結局はよい通訳ができるようにならなかった者もいる。

台北輔仁大学に翻訳学研究所が開設され、私はそれぞれの学生に必要な能力に応じてクラス分けをし、適切な講師を招いて指導にあたらせている。指導内容には、言語運用能力向上・個別言語の発音矯正・テクスト理解（以上、すべて英語と中国語の両言語で指導する）、複数タスクを同時に行う訓練・ノート・テイキングの技術・スピーチパフォーマンスの訓練が含まれる。

こうした授業構成によって、通訳を指導する教員は他の面に気を取られることなく、自分の担当する通訳指導だけに力を注ぐことができる。大学（一般的には修士課程）で通訳コースを開設する場合は、上記のような科目編成を採用するのがよいだろう。

終わりに

この講演では主にノート・テイキングについて話し、さらに指導方法に関しても簡単に触れた。私は逐次通訳のノートは一種の奥深い学問であると考えている。しかし、よいノートがとれるようになれば、通訳者は水を得た魚のように、自分の長所を発揮することができる。だからこそ、優秀な通訳者は必ずやノート・テイキングのスキルを身につけなければならない。

教育指導については、私は現今の徒弟訓練的なやり方に全く満足していない。通訳者がノート・テイキングを行う際の思考過程を分析する方法が何かあるはずだし、それによってより体系だった教育がなされるべきだと考えている。この拙い講演がきっかけとなって、同業者あるいは学術界の先賢がさらに研究を進めてくださることに期待したい。

以上

訳者解説

鄭仰平が述べているように、ノート・テイキングは逐次通訳の成否を決定する重要な通訳スキルのひとつであり、半世紀以上前から通訳者養成訓練の立場からさまざまに検討されてきた。以下に主な先行研究を簡単に紹介してみよう。

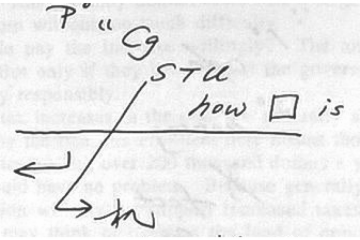
逐次通訳のノート・テイキングに関する記述としては、1952年に元国連通訳者のJean Herbertが“The Interpreter's Handbook: How to Become a Conference Interpreter”の中で触れたのが最も初期のものであろう[7]。Herbertは「逐次通訳」の章をすべてノート・テイキングの説明に費やし、ノートを取り始めるタイミング・論理分析の重要さ・読みやすいノートにする方法・用いる言語と記号や略語などノート・テイキングに関わる主要な論点を具体的に述べている。Herbertの同著は通訳教育を行う海外の大学院では必読書となっており、鄭仰平も目を通していたに違いない。その後、Jean-François Rozan が逐次通訳の理論と指導に関する専門書[8]（仏語版）を出版し、逐次通訳の指導の基礎を築いた。Rozanの研究はAndrew Gilliesによって引き継がれ[9]、2005年には逐次通訳のノート・テイキング指導について本格的に論じた著書[10]を出版するに

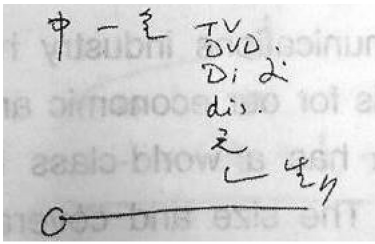
7 “The Interpreter's Handbook: How to Become a Conference Interpreter” Univ. de Genève, Faculté des lettres, Ecole d'interprètes, Librairie de l'Université, 1952　なお、日本語への抄訳は以下のサイトを参照されたい。
http://nikka.3.pro.tok2.com/handbook.htm

8 “La prise de notes en interprétation consécutive” imprintGenève : Librairie de l'Université, 1965.

至った。Gilliesの著書は国際会議通訳者協会（AIIC）の逐次通訳コース教本に採用されている。

台湾・中国に目を移すと、中英会議通訳者・教育者である劉敏華は1993年に『逐次通訳とノート－理論・実践と教学』[11]を輔仁大学出版社から出版し、第四章「逐次通訳のノート」で46ページの紙幅を割いてノート・テイキングの理論と方法について述べているほか、第五章「逐次通訳ノートの問題分析」では中英両言語を対照しながら多くの実例を挙げて解説している（同著は輔仁大学翻訳学研究所の指定教材とされ、その後2008年に書林出版社から再版された）。2004年に北京で出版された『実践通訳』[12]は、1995年から英国政府専属通訳者として英女王・首相および上下両院議員と中国指導者層の会談通訳を担当する林超倫が著した、中→英、英→中双方向の通訳能力を向上させることを目的とした通訳教本である。第一部として「理論学習」の章が設けられ、ノート・テイキングの原理と要領および通訳業務を行う上での注意事項など実際的な問題についての解説を行う。続く実戦練習部分ではまずオリジナル・スピーチの全文を掲載し、左右に専門用語の訳語を記す。その後、一段落ごとに分けた起点言語テクストと目標言語テクストを掲載し、その右側に手書きのノート画像を配する形式をとる。以下の図は劉敏華と林超倫の著書から引用したノートの例であるが、いずれもこれまでの研究成果に従った形式を踏まえたものになっている（写真左は劉敏華138頁、写真右は林超倫171頁）。





9　“Note-taking in consecutive interpreting” Jean-François Rozan ; edited by Andrew Gillies and Bartosz Waliczek Tertium, 2004.

10　Note-taking for Consecutive Interpreting: A Short Course（Translation Practices Explained）　Routledge（2005/11/30）

11　劉敏華『逐歩口譯與筆記 理論・實踐與教學』輔仁大学出版社　1993

12　林超伦《实战口译》外语教学与研究出版社　2004

以上のような矢印や記号を図式的に配した逐次通訳ノートはまた通訳理論に大きな影響を与えたセレスコヴィッチ（D. Seleskovitch）[13]が提唱した「脱言語化」の考え方を反映しているようにも見える。

逐次通訳のノート・テイキングはプロの通訳者にとっても通訳学習者にとっても注目されやすいテーマであるだけでなく、人間の言語理解や情報処理の方策を考えるうえでも注目され、研究はその後も継続して行われた。日本でも通訳に関するMook[14]等で紹介されるだけでなく、研究論文も多く発表されている。最近は逐次通訳に関する研究論文があまり見られなくなったようだが、日本通訳翻訳学会のアーカイブ[15]に掲載された逐次通訳に関する論文が数本あり、いずれもノート・テイキングについて触れている。

最後に今後の研究の可能性について述べてみたい。これまでの研究では、印刷物に実際のノート例を写真等で示すしかなかったが、最近はDVD付きの教本が出版されたり、動画投稿サイトにオリジナル・スピーチの音声と同時にノートをとる映像を掲載したりするようになった。こうした映像資料は鄭が述べた「いつ書き始め、どのように書くか」を如実に示すことが可能で、さらには「通訳者の思考過程を分析する」資料として利用することもできる。単に通訳の実践に用いるテクニックとしてだけでなく、通訳者の起点言語テクスト情報処理方法の検討を通じて、新たな研究につながっていくことを期待したい。

以上

鄭仰平氏　略年譜（資料：2014.7.29　香港「蘋果日報」Apple Daily）
http://hk.apple.nextmedia.com/news/first/20140729/18815345

1929年　香港に生まれる。
1948年　中国広州の中山大学医学部入学。
1950年　マカオに移住。
1960年　インド、ニューデリー放送局入局、中国語アナウンサー。

13　ダニッツァ・セレスコヴィッチ著 / ベルジュロ伊藤宏美訳『会議通訳者―国際会議における通訳』研究社　2009、原著・仏語版は1968年出版の古典的著作
14　イカロス出版が年に一冊発行する『通訳者・翻訳者になる本』等
15　http://jaits.jpn.org/home/archive.html
2000～2013年までの掲載論文を閲覧可。

1965年　イギリスBBCラジオ局入局、放送通訳者。
1972年　香港立法局の中英同時通訳サービス導入にともない、政府同時通訳部主任。
1982年～1984年　英中間の香港返還交渉におけるイギリス側首席通訳者としてサッチャー英首相、香港総督サー・エドワード・ユード、英駐中国大使パーシー・クレイドックらの通訳を務める。
1985年　英中交渉通訳の功績により英国よりメンバー勲章を受章。
1986年　香港政府Chief Conference Interpreter。
1987年　香港政府退職、米Monterey Institute of International Studies（モントレー国際大学院）通訳専攻コース教授。
1988年　台湾輔仁大学翻訳学研究所所長に就任。
1990年　香港に戻り『明報』新聞英語版編集長および香港大学・中文大学・香港城市大学・バプティスト大学などで翻通訳学科主任を兼任するとともに各種の国際会議で同時通訳者として活躍。
2005年　リタイアし北京に移住。
2014年７月25日午前９時40分に逝去、享年85歳。

文献

劉靖之編『翻譯新論集香港翻譯學會二十周年紀念文集』商務出版社　1991
鄭仰平「連續傳譯筆記- 藝術家的工具」『翻譯新論集』284頁～292頁
劉敏華『逐步口譯與筆記 理論・實踐與教學』輔仁大学出版社　1993
林超伦《实战口译》外语教学与研究出版社　2004

論文

染谷泰正「通訳ノートテイキングの理論のための試論--認知言語学的考察」日本通訳翻訳学会『通訳翻訳研究』2005
永田小絵「逐次通訳ノートから見た談話理解の方策」日本通訳翻訳学会『通訳翻訳研究』2000
松山晶子「英日逐次通訳とノートテーキング－訳出時間に着目した考察－」日本通訳翻訳学会『通訳翻訳研究』2008
ベルジュロ伊藤宏美「逐次通訳におけるスピーチ理解の認知プロセス：ESIT 日本語セクション訓練生の認知スキル習得について」ソルボンヌ・ヌーヴェール＝パリ第三大学博士学院博士論文　2006